

<前回：オリエンテーション・導入>

1. 授業の概要・目的

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新なる展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2016年度後期は、まず、「哲学と神学」の歴史的概観が行われる。

2. 成績評価：レポートによる。

<導入：宗教哲学の概要、英語圏の場合>

(1) 宗教哲学の概要

1. 哲学的思惟と広義の宗教哲学

広義には、哲学的思索は、常に宗教的テーマに関わってきた。その意味で、哲学は宗教哲学を含む、あるいは宗教哲学を思索の頂点としてきた。

古代ギリシャの場合。

2. ペルシアからイスラエルあるいはギリシアへ

波多野精一『西洋宗教思想史(希臘の巻)』(『波多野精一全集 第三巻』)

3. 狭義の宗教哲学

- ・哲学の神学からの独立＝自律性
- ・近代啓蒙思想(理神論の系譜)の意義とドイツの古典的哲学

カント、シュライアーマハー、ヘーゲル

西谷啓治「宗教哲学——研究入門」(『西谷啓治著作集 第六巻』創文社)

W. Pannenberg, *Problemggeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997.

4. 宗教哲学の諸伝統あるいは多様性

- ・ドイツ古典哲学の意義
- ・英語圏／ドイツ語圏／フランス語圏

(2) 英語圏における宗教哲学

5. 英語圏の思想的伝統

理神論と自然神学、経験論、分析哲学、プラグマティズム

6. 典型例としてのヒック

John Hick, *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963 (1990. Fourth Edition).

7. Christian Philosophical Theology

Charles Taliaferro, Chad Meister (eds.),

The Cambridge Companion to Christian Philosophical Theology, Cambridge University Press, 2010.

8. 英語圏のキリスト教思想における「哲学と神学」

・宗教哲学／哲学的神学

・媒介項としての自然神学の存在

神概念、存在論証と悪、啓示と理性、論証と言語・・・

9. ヨーロッパにおける神学の動向：総合大学における神学部、神学から宗教学へ
学際性における学問性

1. 哲学と神学、あるいはキリスト教神学の起源

Q：キリスト教神学とはその起源に即して考えれば何か。

神学と哲学は分離できるか。→ 歴史的考察（思想的）が不可欠。

- ・一般論では答えられない。
- ・哲学の起源としての古代ギリシャ
- ・神学の起源は？

(1) 「ヘレニズムとヘブライズム」という問題設定

1. キリスト教的な神思想は、キリスト教的伝統を構成する複合性に即して理解する必要がある。この点で、まず参照できるのは、19世紀以来、マシュー・アーノルドの主張を通して普及した、「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論であって、⁽¹⁾ 19世紀以降の近現代キリスト教思想が、この類型論によって示されたような伝統の複合性あるいは緊張関係を自覚的に捉えていることは——近代における、ギリシャ的近代の伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見——、たとえば、「ルネサンスと宗教改革」におけるトレルチの言葉からも確認することができる。

「それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである」、「この二つの契機はそれがたがいに緊張関係に立っていることによつて」、「将来においてもわれわれの運命になるであろう。」⁽²⁾

2. キリスト教神学の形成過程

以上のように、キリスト教思想はヘレニズムとヘブライズムとの緊張関係において成立したものと理解できるが、これは古代地中海世界におけるキリスト教の形成・展開という歴史的事情によって規定されている。このことは、ハルナックがキリスト教のギリシャ化と述べた事態であるが、しかし同時に、それはギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化でもあった——ダルフェルスが述べるように、⁽³⁾ キリスト教神学は先行するギリシャの哲学的神学を学的基礎としつつ、キリスト論によって哲学的神学を変革したのである——。したがって、キリスト教思想における絶対的なもの問いは、古代ギリシャの形而上学と聖書的思惟という二つの伝統の動的な緊張関係に即して、論じられねばならない。これが、本章の課題にほかならない。

3. ハヤ・オントロギア

有賀鐵太郎は、ヘレニズムとヘブライズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして分析した上で、キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ・オントロ

ギアと説明している。

「ハヤトロギアとオントロギアとの間における緊張関係が問題とならざるをえない。私の言いたいことは、その何れか一方を切りずてるのではなく、また両者の早急な総合を求めることでもなく、むしろ両者の相異を認めながら、その関係を緊張関係、すなわちトノーシスとして捕えるべきだということである。」⁽⁴⁾

4. 近代啓蒙思想の意義＝歴史意識の成立

歴史主義の誕生 → 伝統の歴史的反省 → 伝統の多重性の発見
ヘレニズムとヘブライズムという
問題設定の誕生

- (1) 水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社、1985年、24-34頁。
- (2) トレルチ「ルネサンスと宗教改革」(1913)、『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、74頁。(Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981(hrsg.v. Hans Baron, 1925))
- (3) Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell, 1988.
- (4) 有賀鐵太郎「神学的原理としてのトノーシス」(1973)『信仰・歴史・実践』(『有賀鐵太郎著作集 五』) 創文社、1981年、182頁。この点については、芦名定道『自然神学再考』(晃洋書房、2007年、31-134頁)も参照。

(2) 哲学の一部門としての神学 → キリスト教神学へ

5. 神学は古代ギリシャ哲学起源である → キリスト教・教父

- ・神学とは本来哲学(より厳密には古代ギリシャ思想)の一部門である。
- ・神学自体がギリシャ起源であり、キリスト教化されることで、キリスト教神学となった。

Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*.

パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「序論 学問論と神学」の「第二節 神学の学問性要求の起源」

6. プラトンの自然神学(『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店)

「法律の命ずるとおりに神々の存在を信ずる者で、自らすすんで不敬なことを行なったり、また不法な言葉を口にしたりした者は、かつて誰ひとりいないのである。もし誰かそういうことをする者がいるとすれば、それは彼が、次に三つの誤った考え方のうちそれか一つにおちいつているからである」(885B)

「神々を存在しないと考えていないか」「神々は存在するけれども、人間のことを気づかなくてはくれないと考えているか」「神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから、機嫌をとしやすいものであると考えているか」

「あのような[無神論の]説が、人類全体と言ってもいいほどに広がっているのではなかったなら、神々の存在を擁護するための議論は一つも必要なかったでしょうからね」(891B)

「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにおいては最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)

「『魂』という名前をもつもの、その定義」「自分で自分を動かすことのできる動」(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因のであること」(896B)

「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなか存在するすべてのものとの軌道や運行全体が「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それに類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)

「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)

「神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ」(888B)

「その連中がまず最初に主張していることは、神々は人為(技術)によって、つまり自然によってではなく、一種の法律(慣習)によって存在しているのだということです」(889E)

7. ログス論：ヘラクレイトス、ストア、フィロン

・波多野精一『西洋宗教思想史(希臘の巻)』(『波多野精一全集 第三巻』)

・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン

平石善司『フィロン研究』創文社、1991年。

「第一部 フィロンのログス論」

フィロン『世界の創造』(町田啓、田子多津子訳)教文館、2007年。

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

「もっとも学識すぐれた祭司長スカエウオラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」(服部英次郎訳・岩波文庫『神の国(一)』329頁)

(3) キリスト教神学と哲学との区別と重なり

8. キリスト教・キリスト教思想は、二つの源泉の相互関係において理解する必要がある。

この相互関係の文脈が、古代地中海世界であり、宇宙論的タイプの宗教の伝統が普及している地域であったことの意義。→ 現代までの規定要因の一つ。

・自然神学は宗教に関わる哲学的思惟に属する。

・キリスト教神学は、神学の学的基盤をめぐる議論を介してキリスト教神学と緊密な

連関を有する。

9. 「論証」(argumentum, demonstratio)とは何か。

- ・トマス『神学大全』第一部第二問第三項「神は存在するか」。

有名な「五つの道」による宇宙論的な神の存在論証。

- ・それに先立つ、第一項「神在りということは自明であるか」と第二項「神在りということは論証されうるか」。

そもそも神の存在は論証を必要としているのか、あるいは論証可能なのか。

- ・第一項：神概念が「在る」を含意するとすれば(アンセルムスの立場)、「神在り」は自明(per se notum)となり、この神概念の解明以外の論証は不要になる。

神在りはそれ自体としては自明であっても、「神が何であるか」を我々人間は知らないのだから我々にとって神在りは自明ではなく、論証を要するということである。

- ・第二項：神在りという命題が我々によっては論証を要する事柄であるとしても、この論証は人間にとって可能か、可能であるとすればそれはどのようにしてであるのか。

↓

神の存在は信仰の事柄(信仰箇条)であり論証できるものではないという見解に対して。信仰箇条の内容となる事柄と自然理性によって知られる事柄とを区別し、後者の理性によって知られる事柄は信仰箇条ではなくその前提である。

10. 「もっとも、これ自体としては論証され知られうるものが、その論証を理解するだけの力のない人によって<信すべき事柄>(credibile)として受け取られることがあっても、それはいっこうかまわない」。

神の存在は論証の対象であり、トマスは神の創造行為の結果(創造された世界)から原因としての神を認識するという論証方法(事実による論証)を採用するわけであるが、この信仰箇条の前提である言われた事柄が場合によっては信すべき事柄として取り扱われてもよい。

啓示と理性とは区別されつつも、重なり合っている。→ 神学と哲学

<参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
2. A.E. マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。
『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、2011年。
3. 芦名定道「自然神学」(『宗教学事典』丸善出版、2010年10月)。
4. A・S・マクグレイド編『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』
京都大学学術出版会、2012年。
5. E・グラント『中世における科学の基礎づけ——その宗教的、制度的、知的背景』
知泉書館、2007年。
6. エティエンヌ・ジルソン、フィロテウス・ベナー
『アウグスティヌスとトマス・アキナス』みすず書房、1981年。